

## 目 次

### 報 告

古 畑 正 秋： 日食交響樂 .....	25
----------------------	----

### 原 著

小 川 清 彦： 古曆管見 (II) .....	31
--------------------------	----

### 抄 録 及 資 料

無線報時修正値 .....	32
Ⅻ月に於ける太陽黒點概況 .....	33

### 新 刊 紹 介

中 村 要： 反射望遠鏡 .....	33
--------------------	----

### 天 象 欄

流 星 群 .....	35
變 光 星 .....	35
東京(三鷹)に於ける星の掩蔽(Ⅳ月) .....	36
Ⅻ月の太陽・月及び惑星 .....	36

### 社団法人 日本天文學會 通常總會

来る四月二十五日 通常總會を開催致しますから、會員各位は萬障御繰合せの上  
御出席下さい。

日 時 昭和 18 年 Ⅳ 月 25 日 (日) 午後 1 時より  
會 場 東京府北多摩郡三鷹町 東 京 天 文 臺  
議 事 (イ) 昭和 17 年度會務及び會計報告  
(ロ) 役員改選

### 春 季 講 演 會

日 時 昭和 18 年 Ⅳ 月 25 日 (日) 午後 2 時より  
講 演 者 電波の應用に就いて…… 前 田 研 一 氏  
題 未 定…… 齋 藤 國 治 氏

#### 參 會 者 へ の 注 意

1. 來會者は靴又は草履を用ひられ度し
2. 來會者は名刺に特別又は通常會員と記し受付に渡されたし
3. 交通は省線武蔵境驛より 3 軒半、京王電車上石原驛より 2 軒、  
兩驛より 40 分毎に乗合自動車の便あり
4. 今回は天體觀覽を行はず

## 日 食 交 響 樂

古 畑 正 秋

## 第一樂章

前回の昭和 16 年の石垣島日食観測の餘殷が未だ消えやらぬ中にいつとはなしに此の曲の演奏が始つてゐたので、うつかりしてゐた人はいつ指揮棒が動き始めたのか知らないでゐたほどであつた。低音部が靜かに流れ出し、二人三人と次第に新しい演奏が加へられて陣容もはつきりし、場所も決つたのは昨年の夏頃のこと、それから次第に音色もはつきりと聞え出し、主題が捉へられさうになつて來た。

三鷹では折々會合が開かれて細かい観測の打合せが行はれたり、關口臺長の御盡力で厚岸で観測が行はれることの關係方面への諒解などもすべて済まされて、観測器械の整備が方々で行はれ出したのである。材料の入手が相當困難である折から、此の整備には何れも少なからず苦勞されたらしい。

嚴寒の眞最中の而かも早朝の観測のことゝて、それに對する充分の注意と用意とが必要であつた。先づ観測小屋だの基礎工事だのは遅くとも十一月一杯に完了しておかねばならない爲、各自の観測の内容も、器械の規模もそれ迄に決めておかねばならなかつた。そんなで、十月の終りには既に現地に於て基礎工事が開始され、關口臺長得意の設計に成る小屋が建てられ、食料品や燃料の準備が整へられて行つたのである。殊に寫真用の蒸溜水の如きは輸送の途中氷結するのを怖れて十月の終り早くも到着して観測小屋の西側傾斜面を掘つて造られた室の中に收められてゐた。

斯くして第一樂章アレグロは快適な速度で危氣なく演奏されて行つた。無理もない。指揮者は多年愛用の樂器を揃いて代りに指揮棒を握つた關口臺長、演奏者は大方一度二度と晴の舞臺を踏んだことのある古強者であつたのである。

今は主題も明瞭に聞えてゐる。主な観測者は三鷹から及川、野附、齋藤、大澤、下保の諸氏、麻布から藤田さんと拙者が加はり、更に三鷹の竹田、荻野、樋口の諸氏は色々の工作及び雜務を受持たれる。日食數日前に水野、佐藤の諸氏が後續され、關口臺長も督戰の意味で來られるかもしれないと言ふ。及川、野附兩氏はコロナの分光観測を経験に物を言はせて受持たれ、齋藤氏は寫真に依るコロナの偏光観測、下保氏はコロナの直接寫眞、大澤氏と拙者は光電管組で、大澤氏はコロナの波長別測光、拙者は偏光測定である。藤田氏は主題が少し違つてゐて、太陽周縁の分光測光をされる、大澤氏も光電管で太陽周縁の測光を加へてゐる。後續部隊の佐藤氏は時計係で、接觸時刻測定、水野氏は望遠寫真機でコロナの天然色寫真を試みられると言ふ。

十二月半ば全部の器械類、材料等が三鷹から發送され雪と氷の野を越え海を渡つて北海道へ遙々旅をして行つた。それを追つて年末に既に竹田、荻野兩氏が先行さぬ荷物の整理に當られ、新年早々野附さんが一足先きに出掛けられた。本隊は豫定通り八日及び九日夜出發、汽車が混んで雪の降る夜の夢をまどろむ餘裕もなく早朝の青森へ着き、直ちに連絡船上の人となる。夕方函館發の根室行急行に乗れば、雪に包まれた大沼公園は既に夕靄に暗く、駒ヶ嶽はあるかあらぬか分らぬ。車中に寝て、東が白む頃は荒寥たる十勝の平野をひた走つてゐる。帯廣は雪は少いが寒さうだ。釧路を過ぎる頃窓うつ雨に驚かされ、目的地厚岸は何と小雨に畑つてゐる。驛前の旅館に旅装を解く暇もなく次の樂章の演奏に移らねばならなかつた。

## 第二樂章

一月十日には齋藤、大澤、下保、十一日には藤

田、古畑等大體現地で勢揃ひをし、いよいよ本格的な準備に取掛つた。

日数が相當あるので稍緩徐に、と言つてもだれてゐる譯ではなく落付いて、周到な注意の下に徐々に演奏が進められて行つた。十一日には雨模様も上つて此の地特有の冬の好天氣が始つた。宿を出て、驛の構内を横斷して直ぐ裏手の小山を登つて行く。廻り廻つた數百米の道を二十分足らずで觀測所に達することが出来る。器械類だの燃料だのを運ぶ必要上今迄の道路に手を加へて馬橋が充分通れるだけの廣さにしてあるので山の上まで苦勞なく上つて行ける。東南に厚岸町の一部眞龍を一望に見下し、厚岸灣を隔てゝ對岸の厚岸町は右に北太平洋の荒波を浴び、左に半ば氷つた厚岸湖を控えて仲々の景勝の地である。

眼を西に轉ずれば國立公園阿寒の連山が白く連つて北の方斜里岳に終つてゐる。

一日と寒さも本格的となる。肌を刺す寒風の唸り聲、眼下の岸邊に寄せる鈍重な北海の波の音、それに交つて荷造りを解く木の音金の音、器械を据える槌の音、北邊の地の而かも荒寥たる丘の上に時ならに交響樂が奏せられて行くのである。

南北に行義よく並んだ七つの觀測小屋は殆ど戸が開かれて器械臺等の取付が始まつた。その小屋の列の西に休憩小屋が建てられてあり、朝から黒ダイヤの煙が威勢よく上つて、室内の寒暖計は見える見る零度を越えて昇つて行く。此所で一度暖まつて後一同は夫々小屋へ仕事を始めに出掛けるのである。戸外の風は益々つづて行く様である。その風に吸ひ込まれる様に藤田さんが黙つて出て行く。一番北の小屋で器械臺の取付を大工と一緒に始めたらしい。その次の拙者の小屋では赤道儀の据付けのコンクリート臺の高さを直す爲に人夫が數名でヨイトコリヤと樂音が雜音が分らない聲を出してゐる。五番目、六番目の齋藤、野附さんの小屋の邊りでは窓か臺でも造られてゐるらしく大工の鋸の音、金槌の音が風の間に々々聞えて来る。一番南の小屋はまだ戸も開かれずに砂埃がその廻りを空しく駆け廻つてゐるだけである。今日か明日かと待つ中に、十三日晚くになつて及川さんが悠々せまらず來着された。新參者には眞似の出来ない落付き振りである。而かも翌十四日には

此の地の町當局及び關係方面に挨拶に行かれ、小屋の開かれたのは漸く十五日の朝であつた。

觀測小屋の戸が全部開かれた頃、連日惱まされ續けた烈風も少しは和ぎ、器械類の据付も順調に運んで各種の調節や試験が行はれ出した。主題が色々和を變へて現はれて来る。未だ晒けない太陽を捉へて下保氏が赤道儀の極軸を決める。相次いで拙者の赤道儀も坐り、野附、藤田さん邊りのシーロスタツトも太陽に向けられた。二十日から二十二日には折からの満月近い明るい月に變奏されて寫眞機が向けられ、光電流のメーカーが動き始めた。満月は光量に於ても見掛の大きさに於てもコロナと大差がないので試験には誠に便利なものである。二十日には藤田さんや拙者、二十二日には齋藤、下保、大澤の諸氏が夕飯も食わずに厚岸湖の彼方に冷たく光る月を相手に頑張つてゐた。

二十三日は朝から小雨で、仕事も殆ど出来なかつたが、夜に入つて之が雪となつた。翌朝起きてみると尺餘積つた銀世界を強風が荒狂つてゐる。吹雪を突いて一同觀測所へ強行した。特別に提供された防寒服を身に付けてゐても眞正面から吹きつけられる刺す様な雪つづてに時々立往生する。吹溜りに深く踏込んで悲鳴をあげる者、兎に角く皆山上へ辿りついて各小屋を點檢し、腹の底から揺すぶられる様な風の咆哮と燃えさかるストーブの快よい和音の中に晝食を済ました。

書き遅れたが、晝食は山の上で荻野氏の獻立に依り美事な料理が空箱を利用した美事な食卓の上で供せられるのである。蓋し腹が空けば何でもおいしい。

此の大雪は一同にとつて待望久しきものであつた。と言ふのは連日の晴天下に乾ききつた砂が阿寒風に煽られて所嫌はず入り込んで誠にうまくなかつたからである。然し雪で完全にその難が去つて、藤田、及川氏等も漸くシーロスタツトの鏡を本物と取換へるなどその效や大であつた。

一月二十七日午後は比較的穩かな此の樂章に耳を聳せんばかりのフォルテが始まつた。休憩小屋が忽ち工場と化し、齋藤氏の使ふ電氣ドリルの音、大澤氏がシールド用のブリキ箱を急拵へする金屬音、それに拙者がスリットを改造する鐘の音を添へて荒屋を揺がさん許り、如何にストラビン

スキーの狂想曲と言へども之には顔負けをしたらうと思ふ。

此の頃から意外に暖い日が続いて物よい防寒服に身を固めた一同も拍子抜けの形であつた。二十九日には雪解けの道を東北帝大の松隈、吉田兩氏が登つて來られて爐邊談話に花を咲かせた。三十日には佐藤、富田、三十一日には水野の後續部隊諸氏が來着、佐藤氏は早速休憩小屋の中に無線時報受信機をずらつと列べたので今迄雑然とした山小屋の觀があつたものが忽ちいかめしく科學する姿と變つた。水野氏は下保さんの小屋の隣に眞新しい望遠寫眞機を据え込んで空箱と天幕で風除けを作つてゐる。

齋藤氏の小屋の前に妙なものが出來上つた。臺から一米程の柱が立つてその先に圓盤がついてゐる。信心深い者が見たら神棚と思ひもするだらう形をしてゐるが、我々は之をバスの停留場と見た。皆來てみては一言何かひやかして行くので或る朝それに貼札が附けられて曰く、「之は觀測器械の一部につき觸るべからず」。

二月二日關口臺長と學生四名到着、之で全員十八名の大世帯となり日食まで三日を餘して愈々最後の瞬間の迫りつゝあることを感ずる様になつた。此の日の午後は觀測器械全體を新聞記者に開放、横を向け立て坐れと丁度花嫁御寮の寫眞を撮られる様で見て居る方で却つて羞しくなる。

午前六時といふに早くも起きて觀測豫行演習に出掛けて行く様になつた。早朝は大抵零下十數度であつたが、少しも寒さを感じないのは妙である。天氣が下り坂なのか二日三日と薄雲が次第に増して、三日の午後には再び雪となつた。此所で降つてしまへば當日は霽れてくれるかもしれないと希望が氣休めが分らない氣持で小屋の隙間から飛込む雪片の結晶を手にとつてみたりする。此の雪の化粧直しは仲々未練があるらしく四日になつてもまだ降りたげな空模様であつた。

四日の晝には山の下神社から太鼓が運び込まれて此の樂章の終りに附け加へられることになつた。午後一時半最初の全員の豫行演習が開始されたのである。皆既十分前、五分前から一分前までを告げる太鼓の響き、用意萬端を濟ませて食既の瞬間を待つほどに關口臺長の合圖と共に一分五十

六秒の戦闘が開始される。練習であると言へ緊張して動かす手は幾らか慄えてゐる。一分と一分半過ぎが同じく太鼓で知らされ生光の合圖でホツとする。皆好調子の様である。更に自信をつけようと二度三度繰返されてもう大丈夫といふところまで持つて行く。終つて休憩小屋に集つた頃西の方に少し青空が見える程になつて來たが誰も餘り天氣のことは口にしない。其所へ釧路測候所から天氣圖が届けられ、臺長が開いてみたが黙つてそのまゝ封筒に收められた。悪いのかと思つてそつと顔色を伺つてみたが曇つても居ない。誰も尋ねようともしないで平氣な顔をしてゐる。

夕食を済ました頃空はすつから晴れてしまつた。開戦前夜、皆一應最後の點檢をし、最後の仕上げをしに交々山へ出掛けて行つた。一點の雲もなく星が鋭く瞬いてゐる。西には黃道光が昇の邊まで直立して銀河と見まがふ許りである。各小屋には靜かに電燈が燈つてゐる。休憩小屋のラジオからピアノの獨奏が洩れて來た。リストの華かな曲ではあつたが、皆無表情で聴いてゐる。確かに此の交響曲の中ではピアノは一つの伴奏樂器でしかあり得ない。それが終つて、三番小屋から關えて來るメトロノームの響きがいつもと違つた感覺を刻んで行くのも妙である。

### 第三樂章

此の樂章は特にスケルツォと稱つておく必要がある。彼のベートーヴェンの運命交響樂を聞いた者は身動きのとれない運命の重壓にひしひしと押されてゐる時、計らずも此の樂章に至つて運命の餘白を眺めてホツとするのである。我等が此の日食交響樂にもいみじくも楽しいスケルツォを挾まずんばあるべからず。

我等がスケルツォは然し乍ら聊か趣味が落ちて、キンキン鯛に始まるのを常とする。キンキン鯛とは本名をめぬき鯛と言ひ、美しき赤色をしてゐて鯛に似てはゐるが、目が飛出してゐるあたり少しお品が悪いのである。之が每晚決つて我等の夕食の膳に刺身となり、照焼となり、ちり鍋となつて現はれるところからして容易に此の代用鯛が此の附近の特産であることが知れる。殊に刺身は一晩たりとも駄かされたことがなく、荻野、竹田

雨氏はこれで十何日とか二十何日とか續いたと云ふ。何れにしても今時毎晩刺身が食べられるのだから甚だ勿體ない話だが、矢張り物は程度問題で、「又か」が「あゝ又か」となり「チエッ又か」となつて終には手を附けない諸氏も出て來た。然し中には三十一日は續いても苦しくないといふ竹田氏の如き魚好きも居る。

扱てキンキン鯛の夕食に始まる我等のスケルツォは、それを食べ終るか終らない中に圍碁となることが多い。推察したところ下手の横好きと思はれる數氏が、食膳が引かれぬ中にそれにくりと背を向けて始めてゐる。

一月十二日のキンキン鯛は何時迄たつてもその中三つの鰯が空いてゐる。何處へ行つたのかと探しても分らず、一時間以上もしてから野附、竹田、樋口の三氏が懷え乍らやつて來た。風呂好きの三人がまだ沸いてゐない風呂に飛込んで上るに上れず桶の中にもつとしてゐたのであると言ふ。蓋し風呂の湯は上の方だけが暑くとも下は冷たいことがあるといふ簡単な物理的事實を御存知なかつたものとみえる。

一月十三日のキンキン鯛は海に向ふで生れた奴であつたのか、圍碁がポーカーと變つた。圍碁が陸上の占領戦であるならば、ポーカーは正に海上の奇襲戰を彷彿させる。日食とポーカーとは餘り關係はなさうだが、然し晴れても曇つても悠々と落付いてゐられる心臓を養ふのには與つて力があるだらうと思ふ。始めは我武者羅戰士が多く自分の持前を全部張つて平然として負けてゐる様なのがあつたが、二三日して此所に破産法が制定された。それは自分の持前を失くすと破産を宣告されて退場するのである。效果は靦面で分前の碁石を大事に少しづつ張る様になつた。

一月十八日、今夜のキンキン鯛は少し僻んでゐることだらう。對岸の厚岸町へ出掛けた二、三氏が雪のかまほこをしけたま買込んで夕食後盛んに小包を作つてゐる。此の二、三氏は家からの手紙が毎日配達される琴瑟相和氏であることは勿論である。

一月二十日、我々が此のスケルツォの快調に酔ひてゐた折しも、此所に時ならぬ雜音が起つた。宿の一隅に陣取つた旅藝人の部屋から手風琴

の音が洩れて來た。それにつられて荻野氏持參のヴァイオリンを二三氏が取出したものである。その音は澁むが如く怯えるが如く亂調亂歩、G線上のアリヤかと思つて聴いてゐるとアヴェマリヤだつたり、タンゴかと思つてゐるとワルツだつたりする。皆船に酔うた氣持で床についたが、うなされて眠れなかつたのは拙者一人だけだつたならば幸である。

一月二十三日は防空演習で、明りの洩れない及川さんの部屋でキンキン鯛をつつき、續いて各種の奇術奇藝が公開された。トランプ手品が出盡すと今度は靈感術の公開、丁度入つて來た宿の主人五味氏は一番のよきカモ、インヂキだインヂキだを連呼し乍ら大聲で笑つてゐるが一向に種が分らない。外は雨が雪に變つたらしく、突如停電した。懷中電燈をとりに出て行つた大澤さんが廊下で大音響と共に硝子戸に鼻をぶつつけて悲鳴をあげる、げにスケルツォーは樂しめる。

一月二十四日は相變らず停電で、暗いローソクが燈され、灯かゆらぐほどにお決りの怪談が始つたが、時々電燈がおどけた様に點いたりしたものだから一向感じが出ない。其所で話は急轉回して、先輩諸氏が灯の點滅する側のパリだのベルリンだの話を始め皆悦に入つたが、暗いローソクの下、これを樂譜に残し得なかつたのは残念であつた。

月末に後續部隊が到着した。朋有り遠方より來る又樂しからずやと皆ホクホクものである。研究に研究を重ねた手品奇術にひつかけてやらうと手具脛ひいてゐたからである。うまくのぜられた友もあるが、水野氏の如き猛者もあつて却つて幾つかの術を公開されて一同逆手をとられて啞然とする。然し二月二日關口臺長と學生諸氏の到着を待つてスケルツォーは最高調に達し、此所に一大競演が開始された。うまく成功して起る拍手喝采、負けじとお次を承る者の怪しげな口上、滿場興奮の増埒と化したのが、樂器が亂れに亂れてしまつて終に雜音と化してしまつた。聴くに堪へないと許り關口臺長は早々と部屋へ引あげてしまはれた。

斯うした間にあつても矢張り氣になるのは終樂章の演奏であるらしく、色々な夢にそれが現はれてくる。藤田さんは皆既の瞬間モーターが動かな

くなつて乾板の移動が止つた夢を見たと言ひ、拙者も遂にガルバノメーターの絲が切れて途中へぶら下つてゐる夢をみた。野附さんは日食の朝太陽が虧け始めて来るのに誰も起きて来ない夢をみたと言ふ。

此の合宿生活も一ヶ月近く續き、そろそろ終局に近づいてきた頃、誰が一番早起きて誰が一番寝坊であるかを、よせばよいのに宿の女中にくつそり聞いてみた。一番早起きは我が同室の親愛なる藤田さんであり、一番の寝坊は何と最も親愛なる拙者であると言ふ。

スケルツオーの長きは偉大なる作曲家のすべきところでない。

### 終 樂 章

午前四時と言ふに早くも關口臺長が一同を起し廻る聲に始まつた第四樂章は元氣一杯急速調を以てぐんぐんと推し進められて行つた。昨夜からの天候に確信を持つてゐる一同は洗面に通ふ足取も軽く潑刺として張切つてゐる。五時半一同揃つて白み初めた星空を仰きながら觀測所への道を登つて行つた。頭上近く織女星が白く輝き南にはアンタレスが柔かく赤い光を投げかけてゐる。雪を踏む軌る様な靴音、遠く低く聞える波の音、誰も一言も發しないで黙々として歩いてゐる。何事かを期するかの様に。

星もすっかり消え去つて雪の上に觀測小屋が判つきりと姿を現はす頃、一つ二つと戸が開かれて行つた。空がすっかり明るくなると東の地平線に低く棚引く雲に一沫の不安を感じながらも、それを無言で自分に言ひ聞かせるだけで黙々として出撃準備を整へてゐる。東の方地平線近くは紅く染つて、時計を見ると既に日出時刻の六時三十三分に近い。地平線から一二度は層雲が濃く重なつてゐて、初虧少し前二月五日の太陽は何氣ない顔をしてその上に昇つて來た。然し未だ薄雲が重なつてゐて判つきり見えないが六時四十六分の初虧を多少過ぎてから誰かが虧けてゐるぞと言つて叫んでゐた。運轉時計を巻き望遠鏡を向けて、もう一分近くも食ひ込まれた太陽を眺めて安心した氣持になつて電流計の零點の調節に掛つた。薄雲は依然として地平線の上十度近くもかゝつてゐるが、

此の儘移動しなければ皆既には差支へないかもしれない。中天はすっかり晴れて、西には又相當廣く薄雲が張り出して來てゐる。風も弱く氣温も零下十度と下つてゐない様であつて、之で雲さへ伸びなければ中分ない觀測條件である。あれも忘れまい、これも忘れまいと慎重に慎重を重ねて用意を進めても無駄に望遠鏡の周りを一廻りしてゐたりする。休憩小屋へ暖まりに行つてみると交々入つて來ては大丈夫とも大丈夫でないともつかない様な言を残して出て行く。氣を落つかせ様と煙草に火をつけたが、矢張り終ひまで吸ひ切らない中に出て行つてしまつた。再び小屋に戻るともう日影も少し薄くなつて、四圍が少し灰色を帯びて來てゐる。強くない風の音が妙に印象的に響いてゐる。太陽の線を所定の位置に入れ電流計の零點を更に點檢し、移動暗箱の重りを捲き上げた。ひよつと眼を上げると北隣の藤田さんが小屋の外で顔一つ動かさず遮蔽を直してゐる。聲をかけ様としたが何かに口を遮られた様になつて出ない。皆既前五分の太鼓を聞いた頃は空も緋色を増し日影はすっかり薄くなつて西北の木立の中に鳥のざわめきが聞えてゐる。四分、三分、二分すべて練習通りに北側の暗室へ通ふ折しも影帯が雲の上を東北から西南へ走つてゐる。速度は速いが幅も廣く明暗もさう強くない様である。一分前の合圖で移動暗箱を運轉させ秒を數へながら所定の位置につき最後の合圖を待つ。空を見上げると太陽の近くには一點の雲もなく完全に晴れてゐる。遂に最後の瞬間に完全に飛込めると思ふと暑いとも寒いとも分らぬ風に全身を煽られた様な氣分がした。鳥の羽ばたきや犬の遠吠えを神經の外側の方で微かに意識してゐる。關口臺長のウオーツと聞える食既の合圖。

最後の而かも最も感激的な主題が此所に力強く奏されるのである。張りつめた手足を一時に動かしてスリットを開ける。その合圖とともに富田君がカメラのシャッターを切る音が確實に耳に入る。此の一瞬の爲に練習に練習を積んだ動作を確實に一つ一つ頭に入れながら進めて行く。皆既に入つた戸外は案外明るい様で、室内に燈けてある小電球も要らないと思はれる程である。豫定の動作を終つて案内望遠鏡を改めて覗けばコロナの光芒が

視野一杯に擴がつて一、二個所眞紅の紅焰が突出してゐる。アツと思ふ間もなく生光となつて鋭い光が稲妻の如く眼を打つた。二度と奏されない一分五十六秒の主題が完全に現はれて完全に消えた。今、夢から醒めた様に呆然として次第に掻き消されて行くダイヤモンドリングを眺めてゐる。二十秒経つたのか三十分秒経つたのか知らないが始めて我に返つて移動暗箱の蓋をしに小屋を出た。食既前と全く同じ影帯が雪の上を盛んに走つてゐる。【畑つた様な日光も次第に活氣を帯びて明るさを取戻してくる。然し西の方からはまだ怯えた様な犬の遠吠えが氣味悪く續いてゐる。

最後の主題を完全に捉えた各觀測小屋は何れも靜かで餘り興奮した様子も見受けられない。矢張り二度三度場を踏んだ觀測者の集りだつた故もあるだらう。一通り後仕末をして休憩小屋へ引揚げ様として空を見上げると太陽に食ひ入つた月の影はまだ可成り深い。あの殆ど一瞬と思はれる時間の爲に斯うして遙々來たのかと思ふと何だか餘りに呆氣ない様な氣がする。小屋に集る一同の顔は流石に上氣して、消えやらぬ興奮を人の喋つてゐるのもお構ひなしに二重唱三重唱をやつてゐる。

接觸時刻の記録をしてゐた佐藤氏が豫報と殆ど一秒以内に第二、三觸とも合つてゐたことを報ずると、此の幸先きよい第一回の報告に一同氣を好くし、關口臺長も喜色滿面、水筒を傾けて乾杯して居られる。或者は皆既中の空が異常に明るかつたことを言ひ、或者は南と北の地平線が紅く光つて見えてゐたと語つてゐる。コロナの形は完全な極小型ではなかつたが、赤道方向に長く延びてゐ

て、望遠鏡裡には紅焰が數ヶ所ちらちらしてゐたとも言つてゐる。此の間太陽は次第に大きくなつて復圓の時刻が迫つて來た。九時五分終に太陽は完全に元の姿に返つた。空は氣持よく晴れて、雪に照り返された日の光はいつもの如くまばゆいばかりである。

それまで絶対に立入禁止をしてゐた立札も九時半には除かれて町の人々や新聞記者が騒然と小屋に殺到して來てお目出度うを言ひ、たつた今の感激を語る關口臺長の言を原稿にしてゐる。皆既地帯は總體的に天候は良かつた様で、札幌も釧路も晴れて觀測出來たこと、然し根室は餘り良くなかつた等の報道も傳へられて來た。戦時下斯うして勿體ないくらいの大規模の觀測隊を繰出して來たのであるから是非とも天候だけは恵れて所期の觀測が行はれることを自他ともに祈つてゐたのであつて、今此の幸運を掴み得たことを判つきり知つて皆感激に堪へない面持である。

小屋の中ではうどんが作られて代る代るうまさうに吸り込んでゐる。腹拵への出來た者は町の人々に觀測器械を説明してやつてゐる。冬の空に珍らしい綿の様な浮雲が方々に現はれて來て午後には殆ど空一面を覆ふてしまつた。風は少し出て來たが氣持のよい暖かさである。多數の見學人が歸つた頃一同もぼつぼつ宿へ引揚げて行つた。空は再びすっかり晴れ上つて日暮の迫るにつれて寒さが遠慮なく押寄せて來た。美しい日没である。厚岸灣とその向ふに低く連なる山々を紅く染めて眞圓い太陽が靜かに沈んで行つた。(完)

## 古 曆 管 見 (II)

小 川 清 彦

## VII 貞應二年假名曆

好古日録に收められ、多年人口に膾炙せるこの貞應二年假名曆が、同年のものにあらずることが上田博士によつて指摘されたのは一寸意外であつた。これらは既に定評あるものとして筆者などは迂かり看過してゐたものであつた。

この曆斷の年代を同定すべき材料は、

六月大壬申朔 九日庚辰 六月中である。そこで正三綜覽を引き、西紀1000~1700年間に「六月大壬申朔」とある歳を拾ひ出して見ると、次の5個年がある。

康和元年1099 仁安元年1166 貞應二年1223  
正應三年1290 明暦三年1657

これらの各年の、6月中の干支を節氣表から求めると、それぞれ戊戌、己丑、戊子、庚辰、乙酉となり、正應三年のみ適合することが分る。

思ふに貞應二年と推定した人は、節氣には關はらず、他の何等かの據り所から大體の年代を定めそれに近く六月大壬申朔の歳が見當つたので、それだけで十分満足して仕舞つたのであらう。應安七年曆と古今好一對の挿話をなすものと言へやう。

## VIII 應永二年曆斷

穂井田忠友「古曆抄寫」中に、假りに應永二年乙亥曆斷として收められてあるものは、春日若宮神主千鳥家藏古記紙背にあつたものとあつて、蟲喰ひの痕がかなりある平假名筆寫曆で、二十四日から三十日まであり、次に二行の空白を置いて年月日と思しき文字の右破片が僅かに認められるものである。

二十四日癸丑とあるから、月朔は庚寅に當るが、此歳には勿論、その前後近くにも庚寅朔を持つ歳は無い。それで忠友も此曆斷の跋文に、「皇和通曆甚異。今以紙端字尾應永元年十一月一日之

殘畫、且三年丙子元日庚申接續。定爲二年乙亥云忠友識」と朱書してゐる。そして次には、この應永三年曆の卷首から、正月十二日までの部分の模寫を掲げてゐるのである。これでは此曆斷は何年のものか全く不得要領と言はねばならぬ。

今この年代同定に必要と思はれる部分だけを摘記すれば次のやうである。

二七四日癸丑閉 三十日己未執

そこで正三綜覽を引張り出し、應永初年前後約百年間に互り、庚寅朔で大の月がある歳を見付かり次第抜き出して見ると次の九個年が現はれる。

正平四年閏六月	1349	同 十四年十一月	1359
同 十九年十二月	1364	元中二年八月	1385
同 七年九月	1390	應 永三十三年十一月	1426
同 三十四年正月	1427	永享九年五月	1437
文安四年九月	1447		

この中孰れが適切であるかは、節氣を利用することが出来ないので、此場合には曆面に記されてある十二直の配當に照らして見る外はない譯である。

十二直は建、除、滿、平、定、執、破、危、成、收、開、閉の順で毎日に配當されるが、連續的のものでは無く、建が正月節後は寅の日、二月節後は卯の日、三月節後は辰の日といふ具合に配當され、節の日には前日と同じものが繰り返されるのである。それであるから、十二直の割り當てを調べる場合には、節の日が正確に分つてゐなければ駄目であつて、一兩日位の違ひは何うでもいいといふ譯には行かぬのである。

そこで先づ注意すべきは、此曆斷では二十四日以後十二直はずつと連續してゐるので、此間に節が含まれてゐないといふ事である。つまり此曆には節氣が記されてゐなかつたのでは無く、たゞ是



等の日附に節氣が當らなかつたまでである。

さて上記の各年に就き、それぞれの節氣を求めてから、前述の規定に従つて建に當る日を決めて見ると次のやうになる。

1349 七月節甲辰	閏六月十五日	閏六月十九日戊申	たつ
1359 十一月節己丑	十月廿九日	十一月十日庚子	〃
1364 十二月節乙未	十二月六日	十二月十二日癸丑	〃
1385 九月節甲寅	八月廿五日	——	——
1390 十月節辛亥	九月廿二日	九月廿二日辛亥	〃
1426 十一月節庚寅	十一月一日	十一月十一日庚子	〃
1427 正月節辛卯	正月二日	正月十三日壬寅	〃
1437 六月節丙辰	五月廿七日	——	——
1447 九月節己卯	八月廿日	八月廿七日丙戌	〃

かくして二十四日が閉に當るものは 1427、即ち應永三十四年正月あるのみであることが分る。言ひ換へれば忠友が持て餘した曆斷は、應永初年頃のものでは無く、それより三十餘年も後のものだったのである。

思ふに此紙背文書は、最初應永二年と三年の曆斷に記されたのであつたらう。しかしそれはそれ切りのものではなく、應永末年以後になつて補強のため、更に三十四年曆斷片を故意か偶然か、丁度二年曆斷片の眞上に裏打ちしたのであるまいか。

因みに古曆抄寫には、應永三年曆の次に三十三年曆の斷片も收められてあるが、しかしこれは千島家のものでは無く、喜多院所蔵のものであつて、「紙背論草標紙也」と忠友の朱註せるものである。

### IX 應德二年曆斷

これは同じ古曆抄寫の巻頭に收められてあるもので、應德二年四月一日甲子後一條院御五十年忌四月十七日一代要記と題し、具注曆(日記曆)そのものは十七日のだけであつて、その上段には、

後一條院御國忌

箕日 十七日庚辰金閉

とあり、このうち箕と蜜日とは朱書である。そして朱筆で、此一紙日次卷子斷簡者無記事一枚攝津國五田村吉田喜平次所藏也と識語が記されてゐる。

應德二年(西紀 1085 年)四月十七日は庚辰に違ひない。又四月節は己巳六日で此日が建であるから、十七日は閑にあたつてゐる。尙ほ四月朔は畢に割り當てられるから、十七日は箕に違ひない。終りに後一條天皇の崩御は長元九年(西紀 1036 年)四月十七日であるから(東京天文臺所藏「太陽曆祭辰日期推算」)、應德二年は正しく御五十回忌に當るのである。

しかしながら此日は火曜日であつて、決して日曜日(蜜日)ではない。

今念のため四月十七日が日曜日に當る歳を、神田氏の「便覽」を利用して、この歳の前後に搜して見ると、承保三年(1076)、寛治四年(1090)、嘉保三年(1096)、康和二年(1100)などがあるが、干支は一も庚辰とはならない。四月十七日庚辰日曜日となるのは、此歳以降に於て、文永三年(1266)及び永正十六年(1519)の二個年があるけれども、孰れも此曆斷と關係があらうとは思はれぬ。尙ほ長元九年四月十七日乙丑は土曜日である。

要するに此日に蜜日と誤書した根據は全く不可解と言ふ外はない。箕の如き二十七宿の割り當て方は簡單であるから、誤りは生じまいが、七曜日をいきなり曆斷片の日附に割り當てることは可なり困難なことであつたに違ひないといふ點から考へると、結局これは朱書記入者の誤算に出でたものと斷定し得るであらう。而して此だけを除外すれば、此斷片は應德二年四月のものたる條件を十分に具へてゐるわけである。(未完)

## 抄 録 及 資 料

無線報時修正値 東京無線電信所(船橋)を経て、東京天文臺より放送した昨年 12 月中の報時修正値は次の通りである。學用報時は報時定刻(毎日 11 時 21 時 23 時)の 5 分前、即 55 分より 0 分までの 5 分間に、306 個の等間隔の信號を發信するが、此の修正値は、そ

れら 306 個の信號の内約 30 個の信號を測定し、平均したもので、全信號の中央に於ける修正値に相當せるものである。

次の表中(+)は遅れ、(-)は早すぎを示す。

(東京天文臺)

1942	11 <sup>h</sup>	21 <sup>h</sup>	23 <sup>h</sup>	1942	11 <sup>h</sup>	21 <sup>h</sup>	23 <sup>h</sup>
XII	學用報時	學用報時	學用報時	XII	學用報時	學用報時	學用報時
1	— .005	+ .008	+ .003	16	— .048	— .035	+ .001
2	+ .041	+ .025	+ .000	17	— .039	— .017	+ .007
3	— .036	— .033	— .071	18	— .011	— .027	— .031
4	— .085	— .070	— .110	19	— .043	— .021	— .004
5	— .092	— .090	— .152	20	— .018	— .023	— .001
6	— .028	— .035	— .048	21	— .006	+ .014	+ .037
7	+ .015	+ .048	+ .055	22	+ .019	+ .013	+ .036
8	+ .018	+ .050	+ .050	23	+ .047	+ .045	+ .077
9	+ .023	+ .011	+ .027	24	+ .073	+ .081	+ .070
10	+ .009	— .006	+ .030	25	+ .087	+ .058	+ .058
11	— .023	— .032	+ .002	26	+ .136	+ .116	+ .123
12	— .014	— .037	+ .011	27	+ .128	+ .124	+ .130
13	— .015	— .041	+ .008	28	+ .163	— .002	+ .019
14	— .002	+ .001	+ .088	29	— .001	— .047	— .023
15	+ .003	+ .025	+ .050	30	— .027	— .039	— .025
				31	+ .106	— .214	— .205

## XII 月に於ける太陽黒點概況

日	黒點群	黒點數	黒點概況	日	黒點群	黒點數	黒點概況
1	3	86	東部に小群(I), 中央に稍大なる群(II)及び西部に小群(III)あり	16	3	11	(I),(II)共に東に移動し中央に小群(III)出現す
2	3	73	(II)少しく減少す	17	1	2	(II)の他は消失す
3	3	69	大した變化なし	18	—	—	観測なし
4	—	—	観測なし	19	1	2	(II)大した變化なし
5	4	22	(I)(II)共に減少し(III)は消失し新に小群(IV), (V)出現す	20	0	0	黒點なし
6	2	6	(II)消失し(IV)も消える	21	1	2	中央に小群(I)出現す
7	3	7	(I)(III)共に變化なく新に小群(II)出現す	22	1	5	(I)少しく増加す
8	2	7	(I)消失し, 他は大した變化なし	23	2	12	(I)更に増加し新に小群(II)出現す
9	2	21	(III)増加す	24	—	—	観測なし
10	3	29	中央部に小群(I)出現す	25	—	—	〃
11	3	31	(I)(III)は合體し新に西部に小群(IV)出現す	26	—	—	〃
12	—	—	観測なし	27	1	11	西部に小群(I)あり
13	2	13	(IV)急ち消失す(III)減少す	28	—	—	観測なし
14	—	—	観測なし	29	—	—	〃
15	—	—	〃	30	—	—	〃
				31	1	7	(I)大した變化なし

## 新刊紹介

中村要：反射望遠鏡 A 列 5 號, 200 頁, 恒星社發行, 定價 3 圓。

天文望遠鏡を語る人で中村氏を知らぬ人は恐らくないであらう。特に日本に於ける反射望遠鏡の地位を單なる標本的存在から實用の地位に移し, 然も天文愛好者の大部分がそれを使用するに到つた現状の基礎を作り, 普及に努めた中村氏の功は永久に没せぬ所である。不幸氏は早逝されたが氏の研究の一部は「天界」「天文月報」其他の諸雑誌, 數箇の著書によつて残され, 其等はすべて

天文愛好の人々の教典になつてゐる。氏逝いて十年, 此處に氏の遺された論文の一部が單行されたのを心より喜ぶのは紹介者一人だけではないであらう。

本書は著者が最後に系統的に書かれた反射鏡の記事で, 天界 7 卷より 10 卷迄前後 17 回に亘つて反射望遠鏡の知識と題して連載されたものを古典復刻の意味を持たせ(序文), 殆んどそのまま刊行されたもので, 近時の技術進歩に對し最小限の補註が氏の正統を踏む木邊氏によつて加へられてゐる。

本書は勿論最初より單行本の意圖を以て書かれたものではないので、随つて反射望遠鏡全般に互る記述ではない。特に機械部に就ては殆んど言及されていない。外見上は單に本書のみを見る限り鏡面製作を目的とした様に見えるかもしれない。然し山本氏及び木邊氏がその序文に又筆者が本書 p. 37 に又は屢々他で言及されてゐる様に、著者の意は確かに單に如何にして鏡を作るかにあるのではなく、確に如何なる心掛で鏡を作るか、即ち鏡を作るのは天體觀測の爲であると云ふ事、從つて多くの人が立派な批判觀測に堪え得る望遠鏡を持ち、大いに觀測に勵まれる事こそ眞の著者の目的であつたに違ひない。さもなくば嚴正な自戒の態度と、最終技術の公開はなし得られない筈ではなからうか。かく考へるなら本書取扱ふ反射鏡が拋物線主鏡に限られてゐる理由も明で、特別な計算を行はねば、從つて特別な計器なくしては作り得ないものは取扱ふべき必要のない事も明である。之につけて p. 27 の第 V 型第 I 種に對し註のないのを遺憾とする。之は Taylor 發案となつてゐるが、明に Schwarzschild の反反射望遠鏡で、恐らく此儘では初歩の讀者はグレゴリー論との矛盾に迷ふのではなからうか。ついでに第 II 種についても一言ありたい。それはニュートン平面及び  $M_2$  平面の代り直接光軸上に寫眞板を置いた方がよいと私は考へるからである。何故かかる機構にした方がよいのか理解に苦しむのは紹介者だけであらうか。本文について不案内の方も多かるべしと考へ内容を概観するなら、種々の型の反射望遠鏡の記述で第 I 章が終る。本章末尾に當時未だ知られてゐなかつた Schmidt 型の補註がある。

第 II 章は設計の基準と題され、第 I に内外の參考書の目録があり、數種の日本書が追加されてゐる。其他基礎項目を以て終り、第 III 章、第 IV 章で製作準備の爲諸種の材料の説明があり、第 V 章の掘り作業に入り、第 VI 章鏡面の研磨へ續く。第 VI 章終りから第 VII 章にかけて鏡面検査法が説明される。

著者は天界誌上に屢々帶試験を書いて居られる爲、勢ひ 69, 70 節の記載が單行本としての場合稍々簡略にすぎてゐる様に思はれる。勿論著者の他の著作又は木邊氏の著書等を持つて居られる方はその説明で充分納得が行かれるであらうが、p. 95 の 1b, 2, 2b の帶の數字の中には原文より引きつがれた誤植又は著者の計算誤りと思はれるものがある様だが、此の材料だけからは一義的に直し得なかつた。

第 VIII 章が整形で第 IX 章が双曲線の修正になつてゐる。

第 X 章で星像検査をのべ、第 XII 章は完成鏡の處置なる短文で、第 XIII 章に拋物線鏡について詳細な説明があり、第 XIV 章で鏡形と温度變化との關係が實例を以て論じてあり、第 XV 章に諸検査法として相手のこんだ試験法が説明してある。

第 IV, VI の 2 章が接眼レンズに充てられ、行届いた説明と注意に満ちてゐる。

第 XIII 章に種々な鏡材に就ての説明があり、第 XIV 章で鏡製作についての一般的要約、注意で本書が終つてゐる。

本書は何れを抜いても中村氏のエレメントによつて構成されてゐると云つて差支へないであらう。特に第 V—XIII 章は氏が獨力努力と勉強で得られたもの許りで、現在國內で使用されてゐる反射鏡の殆んど總べては誰の作であらうとも、此處に淵源すると云つて過言ではなからう。

單行本の意圖を持たなかつたもの故、補註も行へば切りがないかもしれぬ。紹介者が上に望んだ様な補註は或は編者の意に背くものかもしれぬし、又明に原著者の重點とされた事でもない。然し現在單行本として出版される以上はやはり本書にある以上の小數の補註をも少し加へた方がよかつたのではないかと考へる。

次に本書により始めて中村氏の論文に接せられる方の爲に一言筆者の私見を述べて置きたい。それは中村氏の実點で同時に缺點と考へられるが、讀者への親切の餘り説明の便宜上屢々一見本末顛倒の様に見える議論のある事で、例へば本書 16 頁第 1—2 行の記述、157 頁最後の行の記述等がそれであり、且時々術語を不注意に使用される事がある。例へば本書に於ても枝葉に互るが發散とすべきを分散と書かれてゐる様な例である。

補註者の注意を逸した様に見えるが、17 頁の平面の傾きが  $45^\circ$  以外のものは現在では實用されて居る。例へば Paris 天文臺出張所の 32 吋反射つ接眼部の方向は入射光に對し  $125^\circ$  傾いてゐる。

鏡面研磨に殆んど語るべき経験のない筆者は本書紹介に當り、重要點に對し何者も紹介し得ず、徒に枝葉末節に始終し、故人を傷ける如き言動に出でたと見えるのを恐れる。然し筆者が敢て紹介せずとも、その點は現在第一線の鏡面製作者が殆ど全部氏の系統を引く方だと云ふ事實は以て本書の内容が如何なるものかを端的に示すもので、鏡面製作を志す人は勿論、望遠鏡を既に所持せる人の參考書、未だ持たない方には望遠鏡への理解の手段として廣く御奨めしたい。

近々京都の藤波氏も反望鏡の書物を出版されると聞いてゐる。立場の違ふ方の書物は又本書の言及しない部分に就て缺を補ふものと考へられ、村氏遺稿の今後公表されるであらうものと共に併せて篇首に待たたい。

終りに新刊紹介としては稍々體裁を缺くが次に筆者の知見内での中村氏の望遠鏡製作使用に關した著述の目録を記載し、氏の御勉強振りと偉功を偲びたいと思ふ。

(廣 瀬)

#### 中村氏著作目録(望遠鏡關係)

##### 天 界

1. 一吋望遠鏡の製作法 2, 10 (大 11)
2. 一吋望遠鏡による太陽投影法 2, 94 (大 11)
3. 小望遠鏡について 3 81, 109, 154, 232 (大 12)
4. 小望遠鏡による天體寫眞 4 178, 223 (大 13)

5. 反射望遠鏡の研究 4 284, 311, 359, 395, 446, 5 18 (大 13-14)
6. 京大天文臺の十三吋反射望遠鏡の検査 5 329 (大 14)
7. 河西氏反射鏡の光學部品について 5 371 (大 14)
8. 京大天文臺三十三センチカルバー鏡 5 432 (大 14)
9. 反射望遠鏡の來歴 6 422, 483 (大 15)
10. スレード氏反射鏡 6 538 (大 15)
11. 自作の反射鏡について 6 540 (大 15)
12. 反射望遠鏡の知識 7 292, 340, 366, 446, 469, 8 74, 120, 156, 204, 301, 434, 9 50, 153, 186, 322, 353, 10 1 (昭 2-4)
13. 望遠鏡だより 7 262 (昭和 2)
14. 故カルパー氏の追憶 7 400 (昭 2)
15. 小口徑反射望遠鏡について 8 47 (昭 3)
16. 京大天文臺 30 センチ望遠鏡の光學部分品 8 139 (昭 3)
17. 京大天文臺の 16 センチ f3 寫眞鏡の成績 8 376 (昭 3)
18. 改發氏の純國産 15 センチ赤道儀 10 41 (昭 4)
19. 5 センチ屈折望遠鏡 11 216 (昭 6)
20. 8 センチ反射望遠鏡 11 368 (昭 6)
21. 花山天文臺の光學工場 12 180, 231 (昭 7)
22. 書信 12 442 (昭和 7)
23. 日本にある洋製 Gregory 式反射望遠鏡 13 52 (昭 8)
- 科學畫報
24. 天體寫眞の寫し方 13 548 (昭 4)
- 25\*) 反射望遠鏡の作り方 7 774 (昭 2)
- 天文月報
26. 天體寫眞とレンズ 24 201, 224 (昭 6)
- Kwasan Bulletin
27. No. 178 (1930)
- 單行本
28. 趣味の天體觀測 (大 15) 岩波
29. 天體望遠鏡 (昭 4) 新光社
30. 天體寫眞術 (昭 7) 恒星社
- 附 録
31. 故中村要氏の鏡面製作研究に就いて (木邊成磨) 12 452 (昭 7)
32. 故中村要氏の鏡玉作品研究 (木邊成磨) 13 365 (昭 8)
33. 故中村要氏の遺稿より (原田參太郎) 14 415 (昭和 9)
34. 中村要氏の 11 cm Triplet に就いて (淺野俊雄) 18 14 (昭和 12)
- \*) 筆者の手許になき爲詳細不明

## 天 象 欄

流星群 Ⅲ月も概して流星の出現数は少い。主な輻射點は次の通りである。

	赤 經	赤 緯	輻射點	性質
1—4日	11 <sup>h</sup> 4 <sup>m</sup>	+ 5°	$\chi$ Leo	緩
15日頃	16 40	+54	$\gamma$ Dra	速
18日頃	21 4	+78	$\beta$ Cep	緩

變光星 次の表はⅢ月中に起る主なアルゴル種變光星の極小の中 2 回を示したものである。長週期變光星の中でⅣ月中に極大に達する筈の觀測の望ましい星は R Aur (22日), T Cas (3日), R Cet (4日), RS Lib (4日), RU Sgr (15日), Z UMa (8日), RY UMa (4日), SS Vir (16日) 等である。

ア ル ゴ ル 種			範 圍	第 二 極 小	週 期	極 小				D	d	
						中 央 標 準 時						
062532	WW	Aur	<sup>m</sup> 5.6— <sup>m</sup> 6.2	<sup>m</sup> 6.1	<sup>d</sup> 2	<sup>h</sup> 12.6	<sup>d</sup> m <sub>2</sub> 9	<sup>h</sup> 20,	<sup>d</sup> m <sub>2</sub> 14	<sup>h</sup> 21	<sup>h</sup> 6.4	<sup>h</sup> 0
023969	RZ	Cas	6.3—7.8	—	1	4.7	12	22,	30	20	4.8	0
071416	R	CMa	5.3—5.9	5.4	1	3.3	7	21,	16	23	4	0
005381	U	Cep	6.9—9.2	7.0	2	11.8	26	23,	31	22	9.1	1.9
182612	RX	Her	7.2—7.9	7.8	1	18.7	11	3,	27	3	4.8	0.7
145608	δ	Lib	4.8—5.9	4.9	2	7.9	17	3,	31	3	13	0
035727	RW	Tau	8.1—11.5	—	2	18.5	4	18,	15	20	8.7	1.4
103946	TX	UMa	6.9—9.1	—	3	1.5	25	23,	29	0	8.2	0
191725	Z	Vul	7.0—8.6	7.1	2	10.9	5	2,	10	0	11.0	0

D—變光時間 d—極小繼續時間 m<sub>2</sub>—第二極小の時刻

東京(三鷹)に於ける星の掩蔽(IV月)\*)

(東京天文臺同報 209 に據る)

日付	中 標 時	星	等 級	現 象	月齡	方 向 角		日付	中 標 時	星	等 級	現 象	月齡	方 向 角	
						P	V							P	V
8	<sup>m</sup> 20 28	+14°642	<sup>m</sup> 8.7	D	3.6	110°	55°	11	<sup>m</sup> 19 24	22 Gem	<sup>m</sup> 6.9	D	6.5	40°	345°
9	9 5.8	$\alpha$ Tau <sup>1)</sup>	1.1	D	4.0	61	116	11	20 8	+19°1394	7.7	D	6.5	150	90
9	10 3.7	$\alpha$ Tau <sup>2)</sup>	1.1	R	4.0	266	324	11	20 44	+19°1406	7.8	D	6.6	95	35
10	19 2	+18°920	7.5	D	5.5	20	325	11	21 55	+19°1423	8.5	D	6.6	60	0
10	19 18	127 Tau	6.7	D	5.5	20	325	14	20 6	73 Cnc	8.0	D	9.5	125	100
10	19 27	+18°925	8.4	D	5.5	155	95	14	24 10	81 Cnc	6.4	D	9.7	55	0
10	19 50	+18°938	7.5	D	5.5	70	10	15	22 30	$\nu$ Leo	5.2	D	10.6	40	350
10	20 8	+18°939	8.2	D	5.5	150	90	16	1 56	104B.Leo	7.0	D	10.8	100	45
10	20 9	+18°946	8.9	D	5.5	90	30	24	3 48	29 Oph	6.4	R	18.9	285	270
10	20 20	+18°950	6.9	D	5.5	100	40	25	2 14	16G.Sgr	6.5	R	19.8	240	220
10	20 37	+18°955	8.4	D	5.6	110	50	26	0 39	-20°5344	6.7	R	20.7	235	190
10	20 42	+18°957	7.6	D	5.6	80	20	26	3 34	-20°5381	7.6	R	20.8	315	300
10	20 56	+18°959	7.6	D	5.6	60	0	1) $a=+0.2$ $b=+1.7$							
10	21 32	+18°966	7.8	D	5.6	85	25	2) $a=-0.4$ $b=+1.3$							

\*) 掩蔽豫報は今後1月繰上げて早く出す事にします

III月の太陽・月及び惑星

**太陽** 月初め水瓶座の東部にあり。漸時北東に進み、月末には魚座の南中部に進む。此間に21日午後9時3分春分點に達し春分となる。所謂春の彼岸の中で從つて以後は太陽は北天に入り、正午の太陽の高さは愈々高くなる。日出は1日の6時13分が31日には5時31分となり、日没はそれぞれ5時35分及び6時1分で、晝間は11時22分間より12時30分間となる。勿論春分の日には殆んど晝夜平分で、太陽は殆んど真東より出て、真西に没する。

**月** 1日の出は午前1時31分で同午前11時59分に没する。6日朔、14日上弦、22日満月、29日下弦となり、31日午前2時18分に出た月が同午後0時54分に没して本月を終る。

**水星** 今月中は太陽に近くて觀望に適しない。

**金星** 漸時太陽より離れ夕空に略2時間近く見られる。

**火星** 明方射手、山羊兩座境界附近にありやつと1等星を保つて赤光を投げてゐるのが見られる。未だ觀望季

ではない。

**木星** 双子座中の徐々たる逆行も12日に留となり、以後順行に轉じる。それで今月中は殆んど動かず、赤経7時6分、赤緯北23°を守つてゐる。光度は負2等、視直径も大體40秒で、薄明の中に早くも夕方東天に彗星に先行して姿を現す。

**土星** ヒヤデスの北を戻りすぎたと云はん許りに再び東へ徐々に進んで行く。光度0等、夕空天頂近く西天に見られる。殆んど夜半近く迄見られ、猶觀望季である。

**天王星** 徐々に牡牛座中を順行して居り、光度6.1等。今月中は赤経3時56分、赤緯北20度15分の半度以内にある。夕空直に南中を過ぎた所が見られる。猶觀望季である。

**海王星** 前月同様秋分點近く、赤経12時5分、赤緯北0度56分附近を徐々に大體乙女座 $\beta$ 星と $\gamma$ 星を結ぶ線上を逆行して居る。光度8等小望遠鏡がなくては見えない。來月は衝となる。

**プルート** 相變らず蟹座にある、光度14.5等。

日本天文學會要報 第六卷 第四冊 (第二四號)

内容：本邦古代の日食について(鈴木敬信)

變光星ヘルクレス座 97・1935 星の新要素(五味一明)

箕座 EZ 星の新要素(小澤喜一)

日食計算法の一考察(佐藤隆夫)

日本天文學會會員の變光星の觀測(1941 年)(神田 茂)

定價 一部 3 圓 (郵 稅 6 錢)

昭和 18 年 2 月 25 日印刷

昭和 18 年 3 月 1 日發行

定價 金 30 錢

(郵 稅 1 錢)

編輯兼發行人

東京府北多摩郡三鷹町東京天文臺構内

福 見 尙 文

印刷 人

東京市神田區美土代町 16 番地

(東京 35) 嶋 雷 士 雄

印刷 所

東京市神田區美土代町 16 番地

株式會社 三 秀 舍

發行 所

社團  
法人

日本天文學會

振替口座 東京 13595

配 給 元

東京市神田區淡路町二丁目九

日本出版配給株式會社

# THE ASTRONOMICAL HERALD

VOL. XXXVI NO. 3

1943

March

---

## CONTENTS

M. Himehata : The Eclipse Symphony (Report) .....	25
K. Ogawa: Notes on the Old Japanese Calendar. (II) (Original) .....	31
Abstracts and Materials-Book Review-Sky of March 1943 .....	32